書式７

助成番号	21－A01

成 果 報 告 書

記入日　2023 年　4　月 15　日

フリガナ：(イノマタレイ　) 氏　　名：猪又玲衣	渡航先国名 ベトナム	留学先の所属機関：ホーチミン市人文社会大学 帰国後の所属機関：津田塾大学

研究テーマ：ベトナムにおける障がい児の現状と課題- ホーチミンの施設の事例から -

研究期間　：　2022 年 3 月 ～ 2023 年 2 月（1 年）

研究成果（概要）

ベトナムのボランティア活動の側面からケアの担い手とケアされる者の関係性について理解するため、パラスポーツ協会における野球ボランティアの事例とベトナム人ボランティアへのインタビュー調査を行った。

研究成果（詳細）

はじめに

留学計画の段階では、2019 年 7 月にホーチミンにて２週間、寺院における障がい児ボランティアに参加した経験から、施設で保護された障がいを持つ子どもたちとケアを担う人々を調査対象とし、寺院で生活する障がい児たちがどのような経緯で施設に来たのか、また施設で働いている人々がどのような意識でケアを行なっているかなどを調査することで、ベトナムのケアをする者とされる者の関係性の構造の解析を目的としていた。しかしながら、２０２２年３月実際に現地に赴くと、コロナ禍によって、感染対策のため、施設と直接的な関わりのない外国人が病院、福祉施設でボランティアに長期的に参加することは困難であった。そのため、研究内容を①パラスポーツ協会における野球ボランティアの事例の調査と、②病院に食事提供、寺院でイベントを行うなど、様々な種類のボランティア活動に関わるベトナム人ボランティア達がケアを行う動機と、実際のケアに対して感じていることについてのインタビュー調査に変更した。①において障がい者に触れ合い、②については障がいに関わらず様々なタイプのボランティア活動について調査を行っているものの、当初の目的が「ケアの担い手とケアされる者の関係性について理解すること」であったため、最終的な研究の目的とは合致している。

① パラスポーツ協会における野球ボランティアの事例

＜活動内容＞

この野球のクラスは、パラスポーツ協会が３年前から行っているものである（ただしコロナ禍の最中は１年活動できなかった）。主な活動内容としては、週に一度、水曜日の 16 時から 17 時 15 分まで、ホーチミン市 10 区にあるグラウンドで、年齢は小学生から高校生までの子どもが保護者とともに集まり、簡単な野球の練習を行うものである。多い時は一度に２５人ほどの子どもが参加する。野球と言ってはいるが、子どもや保護者が野球のルールを完璧に理解できているわけではなく、あくまでも家にいるだ

けでは運動の機会が減ってしまう障がい児にとってその機会を増やすために行われている。主なメニュー内容としては、準備運動→キャッチボール→バッティング練習（私の参加当初の９月はバットでボールを打つことが困難だったため、手でバッティング練習をしていたが、２月ごろにはプラスチックのバットを使うようになるまで子どもたちは成長した）→ゲーム→ストレッチとなっている。

＜パラスポーツ協会について＞

この協会では大人から子どもまで、障がいを持つ全ての人に対してパラスポーツなどの運動の機会を提供している。障がい児に向けてのクラスとしては現在、サッカー、ボッチャ、空手、エアロビクス、バスケットボールなどが開講されており、野球よりも以前から行われているものもある。私がインタビュー調査を行った野球のクラスの講師である Cao Chí Dũng さんは、パラスポーツ協会が Facebook で野球クラスの講師を募集していたことから、この活動に関わり始めた。協会からは彼に一回の活動につき、500000VND が支払われている。彼への給料やグラウンドを借りる賃料、活動費用などはこの活動に賛同する企業から支払われている。しかし、賛同企業の数が減ったことから来年度の開催が危ぶまれているという。

＜活動から見られる人間関係とコミュニティ＞

この活動に参加する保護者は子どもの成長や教育に対して非常に関心が高く積極的に参加している。保護者の中には子どもが特別学校教育の中で集団に囲まれながら学ぶことが難しいため、自宅で勉強を教えている保護者もいる。活動を支えるスタッフは講師である Dũng さんの他には私を含め一度に１～３人ほどのボランティアしかいないため、障がいの度合いの異なる子どもたちをすべて丁寧にサポートするには人が足りていない。そのため、保護者も自分の子どもへの運動のサポートに積極的に関わっている。これは人手不足という理由もあるものの、ベトナムの複雑な道路交通事情、また子どもの障がいによる状況から子どもだけでグラウンドに来ることは困難であり、送り迎えが伴うために保護者が同伴しているという理由もある。そのような状況の中で特筆すべきこととしては、ほとんどの保護者が自分の子ども以外の子どもに対しても、まるで自分の子どものように接する点である。ゲームなどの際には、並んでいるすべての子どもに周囲にいる親がサポートを行い、状況によっては親同士が交代して互いの子どもの面倒を見る状況も見られる。私に対しても参加者たちは暖かく接してくれ、当初、投げる、打つなど野球に関わるベトナム語が全くわからなかった外国人である私も快く受け入れてくれた。このコミュニティの中では、一つ一つの親子という単位が個々で存在するものの、お互いに似た状況の子どもを抱える親として悩みを共有しながら助け合っている関係性が見られる。

＜まとめ＞

私が参考にしていた先行研究には施設型の障がい児ケアについて扱っているものが多く、通い型のものであっても学習目的のものであったため、このようなベトナムの地域社会における障がい児のスポーツを通じたケアについて調査できたことは意義のあることであったと考えている。特に、パラスポーツ協会や資金源、そしてベトナムではイベントに参加するにもボランティアに参加するにも、Facebook を媒体とすることが興味深かった。

② ボランティアへのインタビュー調査

＜概要＞

今回の調査では、ベトナム人ボランティアがどのような経緯で活動を始めたのか、働いている人がどのような意識でケアを行なっているかなどについて明らかにするために調査を行った。従って、調査対象者としては「ベトナムで現在や過去にボランティアに参加したことのある人、現在も継続している人」を対象に、なるべくあらゆる年代に行うよう努力した。また、ボランティア活動と宗教との関連性についても興味を持っていたため、そこも意識しながら行った。質の良いインタビューを行えた人数に限りがあったため、同時並行でアンケート調査も行った。

＜ボランティア参加理由＞

学生がボランティア参加する理由として、下記のような理由があることが調査から分かった。

・本人自身が社会福祉学部などに所属している場合、単位取得などの卒業のため

・ボランティア活動に従事し、修了した証拠となるサーティフィケートを取得することで、留学のための奨学金取得や就職活動に利用するため

・ボランティア受け入れ先の職員に就職先や留学先の大学に対して活動者を推薦するレターを書いてもらうため

・ボランティア組織運営などの経験を得るため

・活動に関心を持ったため

などである。従って、必ずしもボランティア先のケア対象に関心があるわけではなく、各々の理由で活動に参加していることが分かった。

次に現在の社会人がボランティア参加する理由として、下記のような理由が挙げられる。

・社会福祉学部などに所属していた経験や学生時代の活動が現職としてつながっており、仕事としてＮＧＯなどの運営を行っている

・助けを求めている人のため

・友人などを得る機会とするため

などである。学生の回答よりも比較的様々な要素で構成されていると感じた。

＜カルマについて＞

その中で一つ興味深い話があったので共有したい。「カルマ」についてである。インタビュー対象者のＴさんによると、カルマとは「良いことをしたら自分に返ってきて、悪いことをしたらそれも戻ってくるという考え方」だという。多くのベトナム人が自分の将来的な幸福を増やすために、ボランティア活動に参加し、徳を積んでいるのだという。ベトナムには、多くのカトリック教徒もいるため、どこまでこの考え方が普及しているかは定かではないが、引き続き卒業研究に向けてはこの「カルマ」という要素がどの程度ベトナムに普及しているのか、そこにはボランティア活動と関係性が見られるかなどを調査していきたい。

留学中の生活・研究でのトピックス

コロナ禍の最中での留学はベトナムがまだ渡航制限を行っていたこともあり、日本人の学生がほとんどホーチミンにいないという状況から始まった。従って、周囲に相談する人がいないことが当初は不安の種であった。しかしながら、最終的に留学生活を振り返ってみた際に、留学の開始がコロナ禍の時期であったことは非常に稀有な体験であり、貴重であった。特に外国人が少ないという状況だったからこそ、多くのベトナム人が私という人間に関心を持ってくれることは嬉しい経験であった、また、日本人が少ないという環境だったからこそ、友人の多くが外国人であるという状況を作ることができた。私は留学に行く以前は、言語が完璧でないと外国人と仲良くなることはできないのではないかと考えているところがあった。自薦書の中でも、「2019 年に参加したボランティアの中では、ベトナム語を全く話すことができず、英語でのコミュニケーションも得意な方ではなかったため、悔しい思いをし、調査において現地語の習得は必要不可欠であると感じた。」と記載しているほどである。しかし、実際に現地に足を運ぶと完璧に言葉を話すことができなくても、私を受け入れてくれ、温かく接してくれる多くの人々に出会った。私が十分に自分の言いたいことを説明できなかった時にも、「それってこういうことが言いたいんでしょ」と推察し、話を続けてくれた友人たちへの感謝はつきない。またベトナム人は言語学習に本当に意欲的であり、私が所属していた大学の日本語学部の生徒が運営する「東日クラブ」では多くのベトナム人が毎週日本語の会話練習に励んでいた。そのような環境は私にとって刺激的であった。このような自分の中の価値観が変化するような経験をすることができたのはひとえに松下幸之助志財団の支援があったからである。この場を借りて改めて厚く御礼申し上げる。

今後の社会貢献

私のベトナムでの留学生活はベトナム語がほとんど話すことのできない状況から始まった。従って、右も左もわからない状況にも関わらず、多くのベトナム人が私を親しく受け入れ、多くの援助をしてくれた。その中で印象に残っている言葉が、「ベトナム人は見返りを求めない、自分がやりたいからやってあげるだけなんだよ」と多くの人が話していたことだ。私はこの考え方に目から鱗が落ちる思いをし、利己的な自分が恥ずかしくなった。そのようなベトナム生活の中で、ある友人が私に「日本でも同じようにベトナム人を受け入れてくれますか？」と尋ねてきた。私は心の底から「もちろんだよ！」と答えることができなかった。現在の日本は外国人に優しい社会とは言い難いと感じていたからである。私が現在行いたい社会貢献としては、ベトナム人を含む外国人にとって住みやすい、働きやすい日本という国の環境を実現していくことである。現在、自分の進路が確定しているわけではないが、外国人にとっても、もちろん日本人にとっても良い国であると自信を持って答えられるような未来を目指して、自分にできることを考え、その成果が日々実感できるような仕事に就きたいと考えている。